

カタルシスを語る(後編)

福島淳 イラスト・福島マルゲリータ



カタ

将来の配偶者にもアルコール依存症のような問題を抱えている人を選んでしまう。これを「共依存」というのは、以前31号でも説明した。

「リービング・ラスベガス」では、サラは娼婦という仕事を(選ばざるをえなかった)のかもしれないが(選んだ)という点で、ペンはアルコールで飲んだくれて死ぬという点で、互いに自虐的、自給的である欠点を持つからこそ、お互いを見過(せない状態)(二重共依存?)に陥っているともいえるわけだ。

ストーリーの進行に合わせてサラのモノローグが入るのに加えて、全編を通じて流れるスティングの、初めて唯一の真実の愛に出会った」というスティングが雰囲気盛り上げる。

気の合った2人は、サラのフラット(平屋が集まった形の賃貸集合住宅)で同棲を始めようとする。当初、ペンはアルコール依存症の症状の悲惨さを説明し、同棲するのは無理ではないかとためらう。しかし、サラは全てを受けとめる覚悟で、「絶対にアルコールを止める」と彼に言わないことを条件に、同棲を始めた。

一緒に住み始めるその日に、彼女は彼にプレゼントを買ってくる。それはシャツと携帯用ウイスキーボトルだ。彼は結局、サラに看とられながら本人の意図通り死んでしまうのだ。挿入されるサラのモノローグは、彼を失った喪失感で溢れているものの、束の間ではあったが、真実の愛に巡り合えたことに満足した表情をしている。サラはペンを失ってから

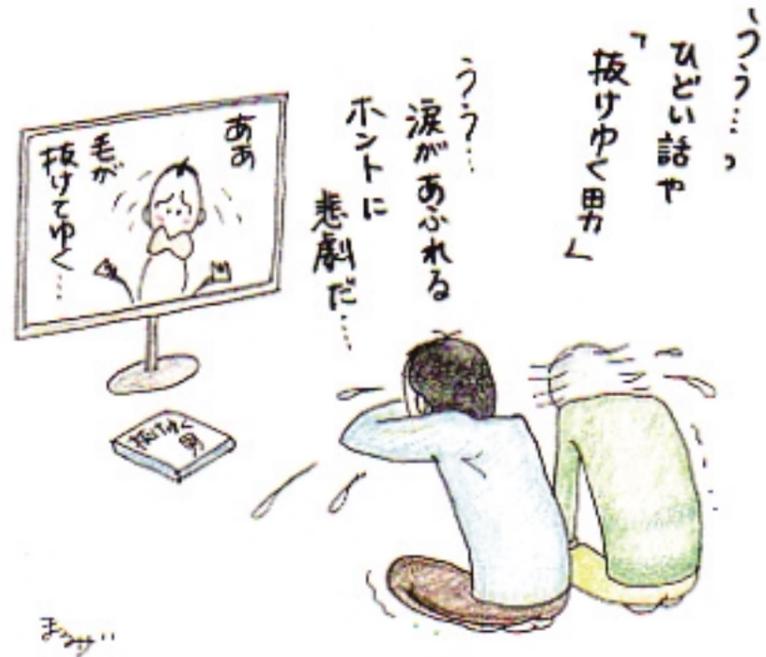
改めて出来事を回想し、その時に何を感じたのかを言語化することだ。「カタルシス」を経験したのに違いない。

映画の終わりに近いモノローグ場面、彼女は「I loved him」と言い涙を流す。この時をきっかけに、サラはペンの死去で娼婦という職業から離れ、真つ当な人生を新しく始めたのではない。僕の想像だが、いいように取り過ぎだろうか。

ちなみに、映画の原作となる自伝的小説を書いたジョン・オライエンは、アルコール依存症を患っており、映画化が決まった後に自殺している。(享年33歳)オライエンは、ペんに自分自身を投影し、小説の中で死なせてしまっただけ、オライエンが抱えていた問題は作品に昇華されなかった、ということになる。つまり、彼自身の「カタルシス」は残念ながら成しえなかったのだ。

客観的に見ると、サラの無条件の愛に応えられなかったペンの不甲斐なきに、苛立たされるのが普通の反応かもしれない。しかし、この映画でペン役をこなし「ニコラス・ケイジ」はアカデミー主演男優賞に輝き、映画も高い評価を得た。つまり、まぎれもなく、見終えた後で不思議な安堵感に満たされる人が多くいたわけだ。これこそ悲劇における「カタルシス」といえるだろう。

あなたも「なぜか好きな悲劇」に出会ったことはないだろうか? 何故、どこに共感するのかわかった時、今はまだ気付いていない自分の一面を発見するに違いない。



カタルシス(catharsis)は本来浄化、体内の汚物を排泄するという意味だ。古代ギリシアの哲学者アリストテレスによって、悲劇を鑑賞することで観客が苦しみ、感情から解放されることも意味させるようになる。更に近代からは、心理学的、精神分析的な解釈が入る。さまざまにストレスによって無意識下に抑圧された感情が形を変えて出てきた症状が、もとの感情が再び意識化されて受け入れられることにより、消えていく。その過程を「カタルシス」というようになったのだ。

悲劇映画「リービング・ラスベガス」を具体例に挙げて考えてみよう。主演は「ニコラス・ケイジ」(ペン・サンダーソン役)と「エリザベス・シュー」(サラ役、映画「カクテル」ではトム・クルーズと共演)。

ペンはアルコール依存症で、妻子に逃げられ仕事も失い、「飲んだくれて死ぬ」のを目的にロスからラスベガスへ車で向かう。サラは娼婦なのだが、ロスでの生活に嫌気がさし、ラスベガスに来た。

ある晩、ペンは横断歩道で赤信号を無視して、サラを車で轢きかける。これが2人の出会いだ。

この映画の構成は回想の形で、サラが精神科医に語る自由連想法のようにも見受けられるモノローグが、ストーリーの流れに応じて断片的に挿入されるのが特徴的だ。ペンを主人公にしたアルコール依存症の悲惨な死に至るストーリーだけでは陰気臭い、暗い話になっただけだが、ラストシーンの側面も加わり、話に深みがましているようだ。

サラは、ペんに一目惚れに近い感情を抱いたことを、モノローグで語る。彼女の娼婦という職業が自虐的な性格を持ち、大きな意味で自給的行動であるにもかかわらず、サラはそのことに自分で気づいてはいない。

だが、サラは無意識のうち、ペンの中にも彼女自身の自虐的な生き方を見出したがゆえに、彼を見過(せない)なかったのではない。以前「心の力カミ」というテーマで書いた通り、人は自分の欠点を他人の中に見出すと、それを見過(す)ことが出来なくなる傾向がある。(本誌22号)

それは、単に見過(せない)というより、「忌み嫌う」感情を呼び起こす。自分で自分の嫌いな側面を罰せない代わりに、同じ欠点を持つ他人を批判することで、暗に自分を罰したことにしてしまう行為だ。だから、「嫌いな人」を思い起こして、出てくるその嫌いな理由は、自分では気がつかない自分自身の欠点である場合が多い。

また、アルコール依存症は高い確率で、酔っ払って暴力を家族に振るったりする。そんな親を持つ子供は、やはり配偶者と同じような傾向を持つ人を選んでしまうとも言われている。

配偶者のほうは、被害にあっているのにも拘らず、自分の援助や協力が足りないのではないかと考えて、例えばアルコール依存症の人から離れられない。自分の力不足で相手のアルコール依存症が治らないと思いついてしまっただけだ。

彼らの子供たちでも、そういう人を支えてあげねばならない、と思いがちで、